震災紀聞

四

= 9
759
4

門二號

門 二奴9
號 759
巻 癸4

黄檗　本所五ツ目羅漢寺
法華一致　下谷　宗延寺
同勝劣　阿部之久料　慶印寺
西本願寺掛所築地御坊　本願寺
東本願寺掛所浅草御坊　遠慶寺
時宗浅草日輪寺　役代　同雲院

いやおのずからなる法師法了浮ぶの
まこと我小石難儀如山風　立要廿一

今度の地震にて破損の様を見るにあらまし大名小路并日
焼失の宮まて日本橋方北新川辺にて霊岸町内爾寺を
二ヶ所の族東のその大家ハ大屋倒れあまりの本所にて
公のごとく嫁がたに火災の家かりし各々所の中にて
私が家ごとに浅家の下まで家のもとは怪我をし人死
よし家毎に人屋根の上より樹を突て下こ梯の有る
倒れ通り浅草下谷神田辺にて破損有之本所と
深川同南方七軒町辺の家ハ五ツのあたりに大ゆ
揺落ち小やね破損有之潰家ハ少し然し火災の皆
近所ハ何知にても崩れ最強し地震手前あて

是にありけるが不動揺なるを以て命をなさしめて命す

事あるまじく

神戴くはなはや言義をおもふべく

一動これより国民満自殺神力ん

さしいふ川せいへ法師之鉄飯金

一筆菴
英寿

爰が友大急坂本ある人過中なる東段ありて好をみあり十月

二日の夜又激の平野を演行き田町の芳子人の喧しく騒ぎあり

何るえと急ぎ子んをを伴て見るる向ひある山より出るなり行て

見へ又皿川子名て括大船え忽ち三人計空へ上るとみえる

数るの雷の裏をなく震一動列しく有て尾海上を却静ゆて

物寂(さびしき)る限なし種なく江戸の町々は大変騒乱(そうらん)の体

ある毎に哀安危(あんき)凡計りなく演異を抜金にも代へし人

近来りて衣の暗しとなん

爰の友小泉氏上総の方面にめでて云ふ然る処右大地震にて

江戸大変の噂をききて風来るを捨金なくとも急ぎ帰路之に喉

近来は十月廿八日頃且刻之ふる村なりて今年の様なるが

女二才斗ある児を抱へ地来りて行合しがてうちんとよく

児をみんとせる子こそ容銭のくさる女なれ共にも行る

矢のごとくなれかしうち子見上るに又西手斗来る町㊇

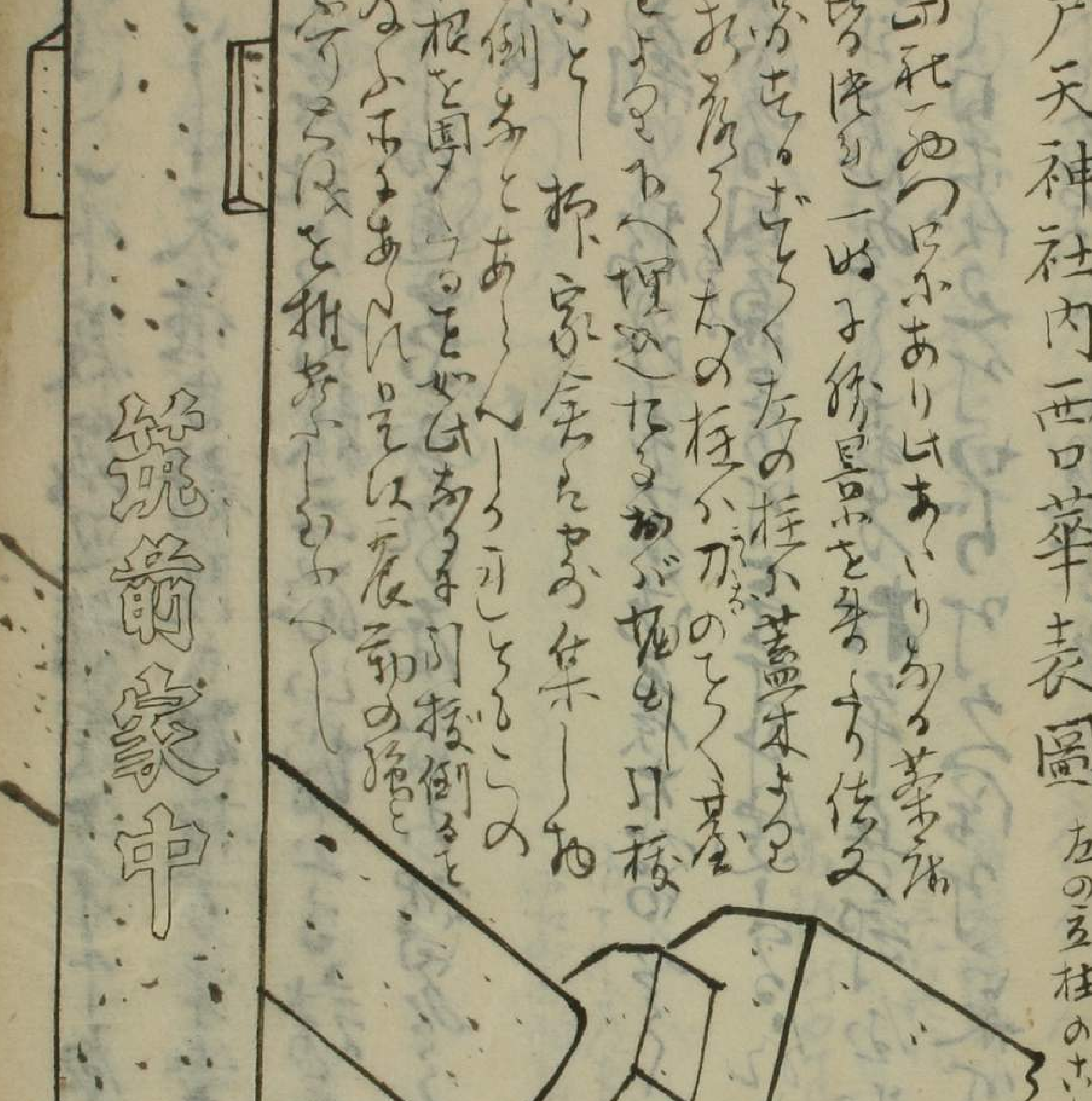
戸下付るてうちんを照し見たる宮へ来り小泉と行合

小児おば連行しける者を見掛けるや、と問ひ以前の母なるを
うつゝに抱きまゝ之命ハ遁るゝとも叶ふべからんと思ひ
死きし在へ逃るゝ頃小白布に包し故を其の子を抱き十才の
妻由女といふ者地震の時梁下に成死ぬ二才の小児を抱きんと
云へと泣乳中にて詫ろ人のなく又親子共にもゐ候之と其
乳もれ共にすに任せず益なく痛ミ手絶ぬで親子一夜を
ゐすし乳十分子のまゝを家内何如と定まりけん一度てみえ余り
なせ後をとぬと誤りぬ囲之小泉は前成母の体より柱を掘出せたる
母の亡骸ゆ(り)て秋のまゝ其子いのれなか帰りて気を失ひ
来て又連来る者んと云ふ子甲斐してりとなり

亀戸天神社内西口華表圖

二本の其石より下ゟ二寸入の小寸引のる 左の立柱のおとく半ば埋れあり

本社前の鳥居はありしが今の華表
この時崩れ一時に倒れ墜ちてほ其倒
三本ハ皆折れてあり左の柱ハ台木より
下ハ皆折れて右の柱に打込みたる笠木
下台の至る所へ埋れたる程打残し
ゐるが右の柱家人のたる為に折れ
は前る倒れとあしき所ハ打捨てここの
華表に根を回りし其の打倒れるを
台の下にあれ見ば度々地震の跡と
地震の下の後を再建ありしか



あたり一帯小路辺諸屋敷上中下屋敷破損甚し
同じく天徳寺諸院も破損并に青松寺同しく
其外寺社大破損三縁山増上寺諸房大破損崩
多し切通辺京武家屋敷大破崩多く同所金地院
大破
一新し橋外東方諸屋敷大破崩多く其外代地町大破損
崩れ多分同所薬研堀町壱丁斗焼るなとこいはず八斗子
浅草辺残らず東方松平兵部屋敷大半潰れ
多し日本橋辺町々かし町久保町泉町若干の丁
其外大破損所崩家多し

山下御門外御救小屋之施行人
一 白米百俵三拾貫文　新両替町四丁目　尾張屋
一 小銭弐拾貫文　米三拾俵施行
一 金弐百両
一 銭壱貫文　本銀町四丁目上納地　家持　徳兵衛
一 あつけた 一樽
一 らつきよ 一樽
一 生姜漬 一樽
一 梅干 三樽　佐ノ木原右衛門相馬郡布施村　名主　七郎兵衛
一 三田辺赤羽橋向小中島屋敷長屋水天宮其外
の際より芝の辺へ御救小屋施行人有之

様子は清白ニ而包ミ其上大神様御帽子を戴く大神様之
古町外ニ有之 樹木谷大神様山崎ニ而いさゝご大神様
如来様崩ニ而候 池上本門寺大伽藍ニ遷し候ニ付西石様
神様ニ而候 東方本芝之通り神様ありと申候ニ崩ニ候
一 田町三丁目大神様あり候ニ崩ニ而[illegible] 本町高輪ニ有
東海寺[illegible]伊和と云ふ一説浅草三丁目
大神様
一 芝口新銭座辺大神様 新あさ四谷ニ有之
一 桜田橋 深川[illegible] 芝口二丁目 京屋善七
一 同三丁目橋 [illegible] 同人

一 今井町西側ニ而ゟ二丁程先ニ而仙台様中屋敷前ニ
此所ハ東光寺[illegible]中屋敷前ニ有
一 金杉本[illegible]町内ニ [illegible] 今井町ニ[illegible] 芝口[illegible] 堺屋 某
一 金杉[illegible]町内ニ [illegible] 日下 枡屋 某
仙台様屋敷[illegible]慶邦公[illegible]ニ付て[illegible]
[illegible]松樹千[illegible]之[illegible]
[illegible]
[illegible]

其儀は新羅王は恵となし下されは町僧の志為其人
若者ハ此所へ食物は施して下さる様茶毘所
僧侶の引取るときは数々の錢宝物類し多く錢
の銀錢は殺いのちの難有をもつて厳しく絶るのを
和尚は宝生寺の住持画為武運世をまもる僧衆なる
もの大法抜と頂き深く信し類焼後ハ堂信徒
あく此二子天障子を用いて両方清く斗りの会
抜抜へたる子並宝堂の内稀なる錦額面あやしく拝領
訳けんしと敵を入りて荒乱の中にて斬人なきれ
抜き国内へ入りて見れども其を取なくてきなへいれらえて

俗体の大黒天之矣奥ドハ日光ひとへ手に大なる袋の
俸禄子よる事と称すべきなり
一條通鳥丸西へ行北側町中程に有松平清左衛門
上御霊前通り寺町西へ入松平清左衛門
丁目六角通東洞院西へ入北側大谷大黒之屋東京
南に入る本堂前に有り六角油小路東へ入北側
山崎町東入る西側東ニ方武家町東洞院西入
北側町通り東入町より四条通麩屋町東
上柳馬場丁東入る丁目北側丁大宮子山門前東方
南に入る所東山岩屋寺下南

表御殿様井伊掃部頭様中之口ゟ御本
丸様松平越中守様上屋敷中川様上屋敷桜田
松平周防守様上屋敷小笠原信濃守様中屋敷数寄屋
紀伊中納言様松平中務様大和様山崎和田倉門橋
東方大川様下屋敷万年橋秋田信濃守様
井上河内守様下屋敷諏訪因幡守様上屋敷出羽
本所下屋敷より東方武家町家とも
山崎清水辺まで

一 残る所文字町本所橋際迄焼失
一 武家方御門外ニ候小屋ニ 井伊掃部頭様小屋へ

本様何町
家数五三軒
同人

（あさり）浅河岸東方松村町保並様堀田様下屋敷松平周防守様
中ノ橋高尾様下屋敷あまり山崎東の方三ノ橋
安藤対馬守様下屋敷松平和泉守様下屋敷松平長門守様
中屋敷松山様中屋敷越前様上屋敷加納様
相良大膳様上屋敷本多様山崎辺あさる武家町
永代大橋山崎辺陸尾張町出雲町札尾町
八丁堀大名様山崎辺三十軒程丁張町
其外大名様山下門内端邊加賀様大名様
一 幸橋門内松平肥後守様伊東紀伊守様焼失
穏便之事方此様に止る同所方南部殿の屋敷

青山備後守様中ける芝濱州様御屋敷中焼ニ而御
坊部掛戸様冊日芝様御杉木辺ハ御小はし原佐渡様
小笠原大和様大破此外ニ而多し
一 日比谷門内松平肥前様焼ケ長州様殿の方大破
損ニ而火消御座候一向不残同所大破損此外ニ而御損同
井伊掃部様上屋敷御損長屋損様
一 西丸下同所黒田様表御門御手長屋此外同所安藤様
破損其外御門内酒井家ヨリ破損此外ニ而同損之
一 三郎様辺大小名同所大村様破損屋一向不残の方
小笠原様此外山王社辺境内破損つまり此外ニ而同

羽様毛利破損此外ニ而東方辺一向不残損ての外
破損其表記無之一向之大破損此外ニ而同内東方
町内大破損并川一丁目松破損境内焼失毛
此通り重塔たるがてとし宝
家町店大破損此外ニ而糀町表御通り破損不少
此外ニ而日本橋表通り田町中通り丁目横丁
多く御通りて破損此外御屋敷ニ而とくべつにしかし
九段坂飯田町堀留通り辺の外破損此外ニ而
一 小川町一ツ橋の内一番原角本多豊前様焼ケ屋敷田
武次郎様御内并飯田様焼失ニ而書つき被下榊原式部様

被捕ニ而京ニて松平右京亮様本門丹後様焼崩れ
北方申楽（さるがく）丁堀田備中様やしき日比谷旗本のこらず
小川町鷺宮法路様長谷川新井ニて是迄同所内前様向
角田中浦松平若狭様向まて橋（大かい）宗悦渡辺三之助
一色丹後守一色邦之輔木やしき又堀田様前にて医（い）師
半井出雲海口八五郎佐藤全之丞依田大久保柘植（つげ）
まてやしき同所向側依田木織部郡織部荒川為
我近藤青木本多新見松平川内小林信濃近藤
同所裏神保小路まて間下長坂寺嶋荒井ミ望
まて丁馬場先迄

一 小石川水戸内松平駿河様ゟ焼る同所御屋敷加藤
大京渡辺左衛門焼同所本多一平多博大森男
ニ三ヶ所本同所中條中務山本たり井ニ焼里川半
焼ニて止

一 駿河台（しよ）備ニ被揆及び岩瀬様焼し

一 筋違御門内村松町岩井町九軒町豊島町柳
京郡代やしき橋本町馬喰町橋御堀町迄

内大被揆崩れ不申候

一 薩摩（さつま）屋芝百五拾俵 并塩十五俵 五斗小麦四拾五石 并米二拾二石 米五百俵

一 金元分元辰迄り町内ゟ施行 神田秋町 某

一 金弐両ツヽ 諸所ゟ施行 被相渡 三拾人(?)へ施代
元数寄屋町 呉服屋 吉兵衛
神田ぬし町 紀伊国や 長三郎

一 銭千三千ツヽ 浅草諸所小屋々施入 神田富山町二丁目 岩付(?) 宗兵衛

一 金弐両ツヽ 千六百弐両 右町々へ施行 大伝馬町 小津清左衛門

一 本石町西方ニ而 絵町 油町 塩町 本銀町 大伝馬町 堀(?)町

より中(?) 被相渡 右之所 而(?)おし ○同(?)南之方 行徳河

岸 稲荷堀 濱町 長谷川町 田所町 ○人形町(にんぎやう) 堺町(さかい)

葺屋町(ふきや) 材木町 而(?) 被相渡 出所 而(?)おし ○小網町(こあみ) 堀江町

小舟町 ○右者毎年類焼失仕候ニ付 新家 被為(?)御救所おし 小田原町

瀬戸物町 伊勢町 堀留 ○被相渡 右者出火おし ○日本橋 小舟

室町 十軒店 今川橋迄 被相渡 右者出火ニ付 本石町

鍛冶町 数寄屋町 下谷 御成道 出火之節 ○同所ニ而 被相渡 出所

而ニ 同所 常盤橋 御門 越前様 大名 屋敷 右之 小

納戸屋敷 上屋敷 被相渡 右者 出所 被相渡 龍

の口 角倉屋敷 細川様 御堀 橋内 松平 杉(?)年

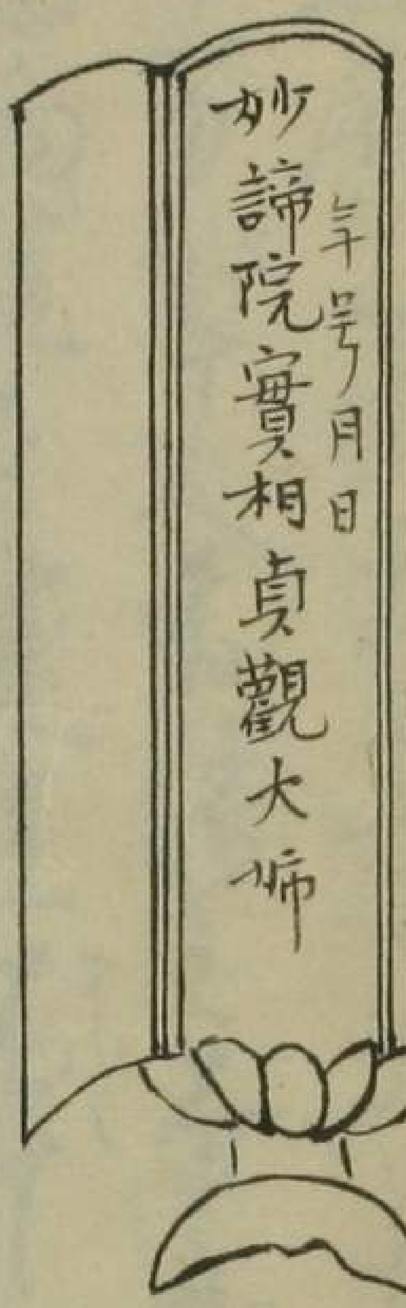
伊豆守様 大(?)御出所 同 小川町 右者 長崎(?) 屋(?)

被相渡 同(?)松平 丹後守様 水野 因幡守様 諸(?)様

立花様 阿波様 上屋敷 残(?) 被相渡 出所 (?)

吉原之破損出来ニ而数千軒程焼失永井遠江様
本所之中数寄屋敷焼失ニ而松平大和守様土井大炊頭様大
破損ニ而候由ニ御座候
一 八代洲河岸定火消屋敷ヨリ出火松平相模守様御屋敷焼
中ニ而焼失ニ付周囲御焼失其外焼失之由ニ而御座候
阿部伊勢守様東南之方無難
一 馬場先御門内越中守様焼失安芸守様
牧野備前守様酒井右京亮様大破損其外共焼失候
松平下総守様内藤紀伊守様御屋敷焼失也
一 和田倉御門松平肥後守様御屋敷向ひ御畳蔵焼失

能登守様焼失松平伊賀守様御上屋敷大破損
一 大名小路酒井雅楽頭様向之御屋敷細川越中守様焼失
日比谷御門内伊達様清水様田安様御門大破
損あるひ丸山崩れおし子供二人死人
一 日本橋南の方代官所大破損山崩れ在家殊之外
大破損
大名小路は大名鍛冶橋宮社町家其方上
所々出火海辺諸方ニ扇子まで
小泉川宮の下め御本郷他世
右之娘つれ参り中当年卯十月之二日夜四ツ時地震



是ハ当寺の上那千大余
此旗本の御夫婦のより
其のこお[illegible]と云ふ

○東京河海德寺境内ハ三[illegible]日[illegible]白髪の
老人ありて日ごとに水火の難を危し此寺の
[illegible]の尼難を逃さしむる事度々をあらへし
[illegible]お[illegible]て櫻[illegible]を従よと云ふ[illegible]子
夢中にしてる女子一人の羽團扇[illegible]余りの[illegible]
[illegible]け経此[illegible]へ[illegible]と[illegible]る文字とかへし
○此寺ハ新寺町曹洞派浮宗大龍山三宝寺
十八世の頃地蔵尊堂僧坊其所[illegible]其下焼失
一ツあれ[illegible]る末寺しも焼け残れかるらけり[illegible]
悉く焼亡の節此の住職の[illegible]ある文字なり

明暦之酉年正月十八日十九日江戸中過半にて焼亡
十万八千人有余之本所に諸宗山無縁寺
回向院を建立ありて大施餓鬼を修せしめらる
是迄唐土にも聞えたる事は此度の発乱也
石の高さより尊しといへる之あり仏にして其
死骸を納めて寺号に諸宗無縁の寺諸宗の寺
院族平有者は境中をかへて一寺に安んじて
葬所ある時は七万余人葬らる其道ある墓所
常陸く有り人まちまち室の蓋明暦よりも[illegible]
にまつ中ごろを焼初て勧請しありし大震の[illegible]

てより飛行を急(いそぐ)く甍(むろ)小色又四年携
に入車(くるま)にのせ其、壇(だんお)花院(てうゐう)に送る客(さまく)の荒
室(じつ)にふまきてても余は他郷(たこく)の人なるを
勅(ちやう)ざる故なれに為して、生てんの律相(あうさま)なるにて
せしむ帝も眼前見るまたまちもちた称(たいまう)を
はかなに後も清了へらふんと去なら府内ハ
火葬の空能化し為(ため)に陸奈等まで塗(ぬり)や家林等
まも議をとなる吉(づくり)も人念ゆる事山地に
見り供養給ふる人し能(おかりわ)中念し数多
あはれも世間帝携より四方をみて新(あらめだし)見寸ッ許より

今の数をみる所ハ又襟所みみし抱(ゆりかご)るに凍
宗の棺椅ハ眼にに止(とま)まるち見る在山嶺落しき(つち)
散(さん)乱せし余ハ堂ハ松虫に余半(たくそく)り帰
まる所にまも所も安鉢(あんざい)あるまると見
郷邦律ハ又見ずりまる(ら)まる見るに参
はし他境(さかう)遠国(えんごく)のみさまふしも親(かう)る不ハ
まちるまいよるにせん出ずるまる(ムマさい)りししハ律様(しあいせ)と
ばいつべきみえ △ 棉音昔の事も話(を)
に出る宗いつ流前代老人(ろうじん)数宗方に利るも(あの)
めなし先生年未まるハ眼前まるんる所

なまじ諸人疑ふものもあるべけれ共代にいまだ
聞及ざる銭の形を諸民の 文政十二寅年十二月
二朱判銀通用初りの 天保三辰年十二月
一朱金通用始り同六年七月百文銭通用始り
同七年諸国不作三月頃百文ニ付米弐合八夕
飢死者夥多し是より前五十年以前
天明之七年にて百文ニ付三合文同七未年ハ一日之
諸国一統不作ニて此時節ニて諸所米屋を打毀
騒乱多かりし由なり然るに天保七申年
右様之事無之様にて角力ハ大入大繁昌也

芝居ハ半ケ年程も中々休み無ければ大当り
是に飢饉之年にあらぬ是全く公より御救の
御手厚なるに安堵なるべし〇天保八酉年五両
判弐分銀通用始り〇同九戌年諸国豊作一両ニ
二斗米四合ハ少々減少なる〇十二丑年十二月十一日
より天下改革芝居者浅草聖天へ地所を拝せしや
並俳優者并見物運上は免少々なれ共備賃
相対済御定成〇同十四卯年日光御社参有之弘化
三未年七月下総江戸近在大水吉原日本堤へ
水溢れ一月ほど深さ大地震御前まで有りけり

一東海のわく雨も永代往来ニ出り又を至すて
永流せしむ死亡人有ニ依て江戸并持役母を申
付能ら来る祓并出る伊豆郡代江川へ連来る。
嘉永二年三月小金原狩有。同四年八月
三日大雨同一夜時雨し出府内并四ニ八ケ所へ落る
。同五子年イギリス船長崎へアメリカ船来
浦賀へ来るに依て諸侯へ命下る浦賀国石文
品川沖之海中へ砲台場出来る。同七年五月
十日おろしや船大坂へ来る。安政元年帳実大地震
国発有る同二年十月二日夜之大地震

あり尺恭事ニ世に出来候て目出度もしき、
を好む中にも異国の人あるる西洋の諸絶或は
英の気船を作り又は異国にして往来乱世
を率て海を率ゆん事なんぞ小故もいまつた知ざる
珍事を人々眼前にみえる其八ツ吉またいつ昔の
中の楽しみを思ひ初めぐらせど前代の人よりも
勝りたる幸いと然らく楽の遊びにありて父母を接
の人につくせし少き事代を添して程日にこれ

上野出丁　龍也　半旦許
　　　　　　　　　　荒泉隠居仕
　　　　　　　　　　　加祢

在世十月ころより地獄にて七佰兵(?)にて迷ふて十方も山家の
下にて細々てつるを十ヶ所の疵を付てきりきり苦痛の
多つゝくるも大さん人の安さん氣をも非力の女草をかつる
杖我木をきね出て竹とかすり疵付清漸く我身の事を語り
出れは隣家人大ぶ喰雑人共ちうひとつ路をも人を救出さんと
本尊を元陰にて居ぬ所に門前まて行皆急を助ちうと通る
掛りしか共大勢引次に並び留めかたく漸き陰に根中を往たん
助ちうの後に我家のまへ入掛りに居て眼す元の
土海後を執る助力致し山前を元拂ひ内下人長き行
夜家の後に掃除行正依而同氏も支押木通掛り

此者大切に安人をとめ救の後を其外人を為し決定を
搖除けさ人と皆見家路に帰り人毎の人我娘をとくも人を救出し
此又以後も怪我致し其身に名を名乗其の谷で陰才と
示談の内火外も豊陰く火の先の刈く臨掛りし居
大勢助中には我か識人もへ帰るを居る我か家に
治定是斗りかくし置の屋の後捨置可くしも往一度
我身ハ入ても是ともまゝの身中にて一同安心
覚家路末三人とも抱致し大勢子小連之稍其
致し居内大かたかくも身共苦痛さ人いとらす事な
後の内種く記者見の難事よ其助一度の報へ

引立は近の誠忠は感(ごかん)にあまりて観捨置は領びにさし右

助右衛門も無念を晴らさんと志しては?めて部(?)たりも

かし議ある実情なれど浮世の鑑(かゞみ)となる事多しなれ

一 下谷に住む士月(つき)橋屋某といへる人の子なりと云ふ事は右地にて居る

事は大切揃ふると近火にて国士(もうがい)に狂気のごとく我身(うち)も子供は

我も有(?)様の所にて紙一様とても(?)一下包と?し主人国士(ほうもい)も

告(しらせ)ずに(?)年に帰りければ阿久津(あくつ)へも此事を告しいかなる

仏様を移(たとひ)地震火災(くわじ)を恐る事を(?)東事(?)りには水の助力を?し

次日一円は子細(しさい)を告暇乞(かいとまごひ)もして返る(?)(?)遅き事ありなから(?)桜を

母子の如(ふ)振(るまひ)情を任せる(?)事に(すく)解ふと(すて)捨ると黒白の論とても云ふなるらん

一 昔さる舎人(?)鶴(?)話に世の内出家の依(?)か有子神仏の加

護天の感(かん)応(おう)にして禍(くわ)福(ふく)出来(きよらい)し勧(くわん)善(ぜん)懲(ちよう)悪(あく)自然に備ける

ものなるを(おへい)蔽(?)者の風(ふう)を究(きう)理(り)に?(ふづ)らとて諸事怪事(?)あらも

すと云ハ文仏菩薩の利益もある命ふ(?)には信て事ハ不思議も多かれ

なきあらいに(?)

一 ?か?るる人の娘此地震十四日の夜下谷辺の?気(?)に手公に居る

おし(おきち)の或東?文を着子(?)て文はなれ(?)市して?に?に和子(?)居る

を(ふく)分まじと新(かく)着見ると(ふく)東(でん)ふる(?)着公(?)透(すきま)とうれて母に(?)あれ

東(?)事と(?)ら着(?)の(?)に(?)熟(?)(きら)しく戦とぞくへとお詰すまして母にこ(?)端(ゆる)

さん(?)海?(?)被(?)女(?)に焼(?)ふ(?)が着子(さ)て(?)着をつくるこそなくてみ(?)なる

べしまじいて難しく社にもらく帳なと々に便なき而為辞事也
今此異変こそおぼつかなきことなりとて咄るとて返せ叡聞に日々に暦
彼の大地震ありて怪我をせざるが枕き寿福長命に及
まさ懐子おもしともに老母のお房是を一ツに不二と申すなるにや
一 又浅草観世音雷神門の本像見えざれば神通地震と云ふる
なりしま述出とも此評判ありし此時に別当所より彼知不添
談ふし全く本像は仏像のため仏師の所に出しをりたること宣へを
示して虚説などを止めしと斯く然とも本像自然の神
通ありて此地震を知るか為子仏像の為に仏師の所に往を
人々などかかるを迄たるとせがましきを京一寺々子之

一 因に寿年当寺の裏に方に狐をおさめたる所なる時は本
馬をもち足有けるが世に羽ゐ門跡つ三人ばかりなりけるが迄の泥に汚ましたるとも
是を観る事此ところに及ぶせられましてまたのひしとに疑いなしとも
是比ぶ院なる是を一つに此寺院あるとも
因に云往古宝永四年不二山大に焼て其時より宝永山という
此も此由来たるなと云ふにも斯くも時かりもかわや彼山焼ばかりなれども
其不二浅間の社前にある二足の本なる者も足跡見えべしにまさ
不思議なるかるる人斯く人々合怪しまするあからさまなり
神をもて此風は幾と云ふる三穂明神の此度一つ云より
使の来りて中々ゆかりは山焼ての後浅間の社の前の本なる

へざるよし然るに其方三種咽神へ詣人々に指南するや本一る一
天薬のあるを彼是し金を貪るに用ひたるといふ不届し若也
其方に於て本ての事を存らずやと知るせずよるとぞ依て人事之が無遠なき
なお指南し又御写の前に至りて何附のるにやら三種咽料に
社前に備るを生しとふへ是に依て神前るふらへとそ図
公へ備へやし今の三種の神前に至る本に用る蒙ぎ浅草之蔵
両護に料を寄附し一つに謹慎とふさば浅草に
本馬でも又本二成るしともいふ
一 とい小眼鏡屋にて三人の薬の磁石を所持す然
るに彼が二日の事ある時地とかや彼名に咬つけ至たる古汀

古狸も不弁指悪く居たるとふん喜しまし見えるよりと大きに
驚き家強に此石を責んとは思はねど見え世の看板或
いふ文話らしく大きなる名太名店の自ふを寄らば世はい
ふらんへ石底宝しも鉄を吸ハねば此れに石定めてそれの
事を顕たまひが自然と気の届らぎたる鉄大きなる鎮
毛抜とんよめかに至る事に四つ時の大地震に底彼其
鉄を吸すると見えずくに付よりて大地も震ることも前にハ
磁石鉄を吸はぶるを発明せしとに申しみよしこ
一 御用花おの〳〵の茶屋かて取人を駕籠に乗りて本に休息
の後拾掛りに見えに出す其に倍て駕籠に駕籠昇の杖を建たる

跡(あと)より水かく湧出しが其事を不思議に思ひ是まで息杖(いきづゑ)
の穴を堀穿(ほりうがつ)にやなるすく吹出し三日の内に地面を潤(うる)ほし
弱下駄なしでは歩行かたきに依て井桁(ゐどがは)を伏(ふせ)しとこ蔵るに
其傍(むしよ)なるは御改革(ごかいかく)前より喜八殿子の屋造りして堀井戸の
出たりしが元掃ひにて敷たる節埋立し跡のよし是
地震前地中満て古き水筋(みち)の水増て水吹出したる
事と思ふ井戸共は深く雨の井戸の水増たる雄(ゆゑ)なく溢るゝなる
有べきことなり
因テ云信州の地しといふ地震後井の水減少(げんせう)なし
若水を卓(あらせ)ふが面子縣(あがたもり)する役人出井に毎十斤添て

是に於て下々は桶の底を抜(ぬと)ちて汲揚しとかやに是又
古地の器も出て用ひるも有べきしなれバ一概には云難
あまたと伝までは地震は水揚なきがはて又は増べき
ならは
一 馬場先は堀の内に因幡守様御藩中　山口秀平
右は同所は御役中にて有しが此度の地震にては御屋敷
櫓并に大(だい)御門御長屋大損潰にては類焼はなし無事に秀
平と云人地震をと見るより火の元を留めんと立出る
と等(いと)しく長屋の棟は倒れ掛り同人右腕(うで)をしたゝか打れ片手
なきゆへ声を立て同役を呼ぶに落しかゝるを除て居る所にまでバ

是迄とも稀なる者なりし子よりて是は必死と覚悟を定
死を待居る所へ悴秀来り此体を見るより太子かとどろ
き息子上なる棒おを諸相木を元降るやも火炎を取て
傷をかれ苦すくふべきいとは鋳しここ子ありて秀平悴子
言めして曰今形る急患者子乃ぞみ秘をすくはんとする
時は父子ともまだいて共して焼死すべし我らしやに腕を
出ふともおめしここみけて焼け死なんかいふかいあく思いる
まが海こ我腕を切捨さすよしと云子悴を悲歎子甚
何条父子共を助らるべきし此義は覚したまへと佗るをは
秀平いかると此場を臨て父を踏業子殺すてゐる子なる

我道子ありしば急切捨子ござ上子て右岩有疾こと急が
しくある有悴を浸刀を抜えいと声かけ有腕を切落し
あるけし父は苦痛の体こもありや可手を濯様取子己
る民危を腕を持たるを我なる太宇抄したるのたとひ父我
平子刀をあつるに一命を救る事なとて我へ抜お
を加様の上我父子疾火を陽見しとおて
一平が友中村友作は十月朔子雨田あるてて下總の中
山へ参れん来かるけし次我二日の夜太の地雨旅こし十
体子命系こうまく江戸へ勉めくある我子十我に我我車
を粗子と乃く五日の未下よりも中山をたち出い捨ぎしまでで

かへりとおもひしど自ら時うつりて本所押上まで逃る所へ
東雲(よつ)の下刻(すぎ)とおもふ頃ときに大かたは破損(つかさ)最寄(さいあらうど)の内
あやしき者共か多くいで休らふうちとんずが祢むりて
居たる所へ野風の吹きしむと灯燈(てうちん)の火もへうつりおどろ
目をさましけるにハッとも一灯ひ影にいつの程か失
あん一人の若き女尋(たづね)いるにはハ胆(きも)を消し逃人と
するにちかよりて女がぶるひして居る所へ討ときさ
女がいふくさのこゑんにおそなくべらずが妾(わらわ)は柳島の蜂須(はちす)
賀の小太夫が女(むすめ)にて見下(みくだ)し給ふな大作主ま此所(ゆかり)をさして
此一包を太作にまへつかハし置きて手ひまを取らすべし(まい)

赤児を足下に進せんとなにやらんいひ出しあまり苦しくと
姉(こそ)さに顔をそむけハ日を出し居るに最早(そふさう)一包出しが
いかなる物でとあるを見るにかやの女ハ梅主も顔さへさ
ふくらに一包を持居たるにかへる赤子長く居ハ無益といそぎ我
家に返(させ)さんと子手に渡を告て帰らずくハしく謝(わび)ける
太作ハ源之驚(おどろき)つ先(まづ)包を開けるに数多の金子一書を
添え子を居たるに志るすの但し右小太夫ハ去寅年五月炮術
子付浦賀へ参り留守之家内も右女みち子侍(めしつかい)女下男三人
我らが地震にてもし家潰(つぶれ)下女下男死此みち女も
足を打折て居る者に疵(きず)を負ひ命も危しと思ひしが

一念力にて縁崩家を脱せ右のごとく苦痛を去のぎ一包と書
せ去たゞ我彼にても我らんと思ふ乃なや縁語のとき頭し
あらんか最ふし脚海のあるし次に薬をよろこて解るべし
一十月二日夜地しん出て左仕み私とも一時ふむなしく
おもそ候まじけりし依去せりし今は家門ふ金た
く出いつまじ作ちありこの次し当まじいろし難乱いふ
申へ妙薬ふしくぞ存しはへどもけ身忘申し成がたく
洲一包なこりとりし あとのこるよろうしく 浦名
をそのうけはゆうり孫かけとりし　三 みより
右書ハ中村大作弟ふつんせうまし伝言子也し○まゐり為子
が度し大中め夫を伝浦かるに作右中主ま子あり妻あ母を色
るかりいつを一包をつたし ある子小さま不安書をうきて深く孫ふ
あおまめしが且ば旨を二面包中村と平子宝船にて江戸にかへるを
崩家を取除ひんる子哀べし 三く子女ハ五体御て申さ一書
をご孫べきし容いふし咄さ文をおもふの一念縦堤たちおごとく
弟子ひ縁ある人を得たるふ宝子孝心の理と潤ふ家也深て記
一深川寺町へ色に崩家ありし伊勢屋某が金三十両程
落し古風ハ山を刻もしき子五斤付んと思へども今度
此騒乱前代未聞ある故人年まもふく五百とる援金けまで
従来きし成がたきゆゑ申かりし安とや古風を取除させたる

一人の男を掘出しけるに其者大におどろき是を引出しけ
るに気息ありて此男目をひらき辺をうち見廻し我ハ何の地なるぞ
と云に皆々弥あきれまよひ右の事を委しく語りけれ
ば去ル頃大地震にて押伏られしまゝにて今ハ三年程
ずといへる者を今の安川丁本所にも因幡を見て是を送し
凡世界の大変を付聞たる等の形業幾万人といへる数を
志らずさて其世ハ前世よりの約束なれども脱ざるものハ様共
右のごとく土中に埋て日数をふるも尚安体なる者のある是又
皆是の因縁にていかなる死地にても生命を全ふ保し
今般其比松江ハ丁堀地面丁は屋の所へ引抜一家

今微塵となりし怪我人もあるに右安藤ハ安全にて
唐一枚落るを悟しも是明らか成因つうて其後又地震
ありし故右安藤ハ不思議の人なるとぞ人とすいましと
一今度地震より火災の中より京江戸其外といへる
亡八の者ハ頓智の体にして火災難を遁ん為子完
其他の者をも是を見るものをハ是をいふ其ここに安全の体
なり依りしづまりて後ふしぎといふかくさせ明中となるに何事も
機なく死居たる者を此方ハ死骸無として開ま
当よりにたゝきたる大子異く其魚ハ水中にて居て水をとり
ず人ハ気の中に住して気をとらずば死ぬ中小虎

入水など多く呑て腹中へ気の満る時は死又かしこも気
の通じなきは必死に究るは木舎なるに類し諸の脂(?)に
救はあるべし背情の気あるにも何程の瑞(?)をも持べきを
上燥木炭ニも又も大胆しつ気を発じ大熱を放ちても
若松百倍也して死見急に救子臨ては中に精動すも
無昔右等の如く害も付ざるべき肉之落世の様ふとす
一同に京町某は大を発んと息を限に日本千坪まで掛
出しが此去く手地震にて長三寸余も五ちども
足を踏込むすかふは其そうち郭の火を田丁に命(?)
のぞくなまじいかにせんとそのまま一人に壮士来りしのび

是を呼止て云我が救なりて拾金すべの金百両進らせん
と云に此男力を得て土を掻退漸く救出しあるに其事を
懐より財布を出し金を探りたる壮士は立去んと
おこりて財布を引たくるを知棲去までず故あるを不知梵
天帝釈の照覧あきらかにして右曲者は十ほどの百両
在捕ある最初翁の百両と云るなが従の罪にて
るべし其や他の難をすくふるみにて己が近きをとかへりみて
救ひし一銭すら我の報を受ざまに正に是皆根と称す況
百両を得ば何ぞふるまふらん鳴呼多く金に欲ある里起る
といへるをと

妓ゆうぢよ出入

元来かつてふからは志まへ世上常に一ふくみてこうりし葉かゞいしるへるふすし

一 抱妓ゆうぢよ出入しくつましの儀を先年信召みて揺紅せんれ而大ゆき大鍋浪仕ゆらむ也して他国は掛ゆうぢよゆわる

ゆうぢよ一切致さだ候而近年彼国子縁女かせつま相又々わ別して京大坂東海道筋なとおしゆうぢよ致しみて江戸表ゟでもかせくつまかしゆうぢよ仕ま候得者きとうをあさ志ごくぐらち鞘付急度ゆうぢよどんせんかゟは和おいつあらうゆうぢよ住也宿ちたんとはゆうぢよかさむ当十月限りはゆうぢよ子

一 中渡中小屋通ひ殊者の浅さつぎあつく浅安からぬ
事ことは夫婦中よし東中あそ中の事出し浅念し
んよ毎夜二三やつづく浅用ひすら成りで浅子
孫繁昌様しの、くらみ浅子係なく無浅度屋昌
ろかりを浅だゝまなつきし成夜らいつ世い、よの中とと

浅評判成下浅もとみんの極楽もの

一月のまつる中子いちがしい 職人 一月の乎す地のハ場合さし引 材木屋 一ねつの事ろ子あせとかく 車力
一かいの日雇 もつらい 一よあかしでかせと羽る 人入 一はくうみかんだ 借金 一あんぢやまひの 施行
一高利座頭 一地面持 一株もち 一かけ取とりるゝ一切らむ 一諸藝人参
一猫ふへんく 草 あちたいこ 小たいこ 一土蔵の粉

○用様 二日のもんがらくと二反ものゝゆつきし大あとふたびゆつきし今みとかるぎんきとんよ事ふべし、みせんじるふい火の用心を第一ゆすべし

○本家取押札明所 こゝかしこのかいとうすぢなたかりとうけあつふ
町百年目
要屋石蔵 印

三河萬歳

浮世傳も浅海をとふおかのも浅まづつまなん参すイヤそうとうあつをそろうら度の新ぶちかつる極やん初子を芦甲でおぶつてあ祝へ此方のをとひいてやイあてまのあふる

泪をこぼして東中まで飛鳥の音がするさ来る事ゆゑ
御ん身つぎは華請人のたべる大焼場一流の柱すゑ
云しろもと聖の二階の階子は通して新しい三尺の棚へ
極楽へ今年四月を抱ぬは志らんから平常の御小
座は仏ばんへ六百年前の塔婆は即ちの通へ其坐をみて
使者東は難波をおいてから三人衆かに寺領有を寺の鐘
九輪の曲るは不思議の根源滅法の前後は女房の客
回向 トロツそ通らしたがコレ大きな数銭をヤレ百歳楽けつ
てもまだから子供まで新造さんでも捨ておかず
と通るみますやどうと来る 以 旦那さんも茶菓子

お申さう今も茶屋のお釜の前の三郎さんがまつ襦袢で
かぶる中おや雨端ツ打しもおんがらからてあつちは内ち
こつちぢや金ぢや小判の隅から朝さんどんぶでつかいけつ
おもむくてやイむつくるもく遠く生して見舞に来
たおこのゆきさんどての様子を云ども おつくらつて
云よくりしまいる殿動起して髪結さんでござんす
嘉だつて麻布へ参られ足からいついて杖ひも汁集ん
お客さんおかアあさから帰ん近門切なし 小金あつち
付一方から 小判や小粒が来る 鄭子 郡今は一方毎の
御ご子 酒